



海外から 研修員に聞く



シルファン・ウグ
(ハイチ共和国)
Mr. Surfin Hugue
ハイチ大学農業・獣医学部 助手

JICA帯広「土壤の診断と保全」コース (2007年5月13日～2007年8月3日)で研修。

イスパニョーラ島 ヨーロッパの植民地としての歴史

1492年、コロンブスはアラワク族やカリブ人が「高い山のある土地」という意味で“アイティ”と呼んでいたこの島に上陸し、“スペインの(イスパニョーラ)島”と名付け、先住民をインディアンと呼んだ。その島の西側3分の1が今の「ハイチ共和国」にあたる。面積は2万7750km²、人口は915万人(2005年)。



スペインやフランスの植民地としての歴史は移り変わり、16世紀には過酷な労働や病気でほぼ全滅した先住民に代わってアフリカ大陸から連れてこられた人々が金鉱掘りの奴隸として酷使された(アフリカ系奴隸の解放を求める蜂起を発端に1794年奴隸制度は廃止された)。20世紀初頭まで続いた歐米各国による植民地時代、地元ではアフリカ系の人々と、ヨーロッパとアフリカ系の混血の人々(ムラート)との対立が繰り返される中で、1804年、古名の“アイティ”に由来する「ハイチ」を国名として独立を宣言(世界で最初の黒人共和国の誕生とされる)したジャン-ジャック・デサリヌ(1758-1806)、1806年に北部に王国を建てたアンリ・クリストフ、1849年に皇帝を宣言したアフリカ系のファウスタン1世など、支配者が交代した。

20世紀前半はアメリカ資本によるプランテーション経営が行われ、砂糖の世界的な产地となった。実質的な独立を達成したのは第二次世界大戦後のことである。(この項の記述は、アラン・ベントリア著「ハイチのクレオール」(1981年、パリ)に基づき、ウグ氏からの資料提供による)

ハリケーンベルト(地図)

2005年9月の巨大ハリケーン(アメリカでニューオーリンズを水没させた「カトリ

ーヌ」)など、北大西洋北部に発生する熱帯性低気圧の通り道に位置する。このため洪水や自然災害の被害を被ることが多い。熱帯気候だが、東に位置する山岳部で貿易風が遮られる半乾燥の地方ではしばしば干ばつに見舞われる。

環境上は、畑地開墾等による森林伐採と土壤浸食が問題なほか、飲料水も不足している。

「土壤保全と改良、農地改良に必要な知識を学びたい」

このコースでは、土壤診断や環境保全の知識と技術の向上を目的とする。農作物の安定・高品質な生産に向けた土壤診断の概念と手法を理解するために、気象、地形・土壤と農業の関わりを理解することを目指している。

「実はハイチでは、農業はあまり重要だと思われていないのです。日本ほど機械化もされていませんが、農業と土壤の関連分野をどのように改良するかを知りたいと思いました」と、研修に臨んだ。十勝地方の進んだ土壤診断を学び、京都、つくば市、東京都等の大学での研修も行った。母国では、学生の土壤成分研究や、土壤改良において農民の支援を行っている。帰国後はそうした場面で今回の研修が生かされる。

主産業は、農業分野ではコーヒー、マンゴー、サトウキビ、豆類、コメ、トウモロコシ、キビの一種のソルガムなどを栽培と砂糖精製、製粉など。軽工業では織物、セメント製造、機械組み立てなどがあげられる。



ノール県山間部の要衝に聳えるシタデル城。
何百年も攻防が繰り返されたハイチ国内には岬や山中にこうした砦が多い。1982年、国
立歴史公園「シタデル、サン・スーン、ラミエ」
としてユネスコ世界歴史遺産に登録された

母語はクレオール語

ウグさんの資料によれば、全人口のうち95%はアフリカ系、残りはムラートである。言語に関しては、限られた富裕層と高等教育を受けた中産層の40万人ほど(全人口の約5%)がフランス語を話し、残りの大多数はクレオール語を話す。クレオール語は語彙はフランス語起源、文法などは主にアフリカ諸語に由来し、西インド諸島や中南米各地で広く話されている。1964年に憲法上に初めて明記され、以降、フランス語とクレオール語を公用語としている。



帯広センターで
研修期間を通じて、「研修、滞在はじめ何事も
全体にとてもよく計画されていたと思います」。書
道教室にも参加して筆で「山」、「月」、「星」、「愛」
などの字を書いたのは楽しかったようだ。インタビ
ュー時、「ハイチのことを知って欲しい」と、故國
の歴史を熱心に語ってくれた姿が印象的であった。
通貨はグールド(Gourde/HTG) 40.2gourdes
=1米ドル(2006年現在)

NRCニュース

「北方四島日本語習得研修」の第2回目が終了

平成19年度の第2回北方四島日本語習得研修が8月7日から9月5日まで実施され、研修員は日本語の習得はもちろん、日本文化の視察や体験にも熱心に取り組んでいた。

今回も研修員は男女合わせて10名。研修への参加は6回目となる色丹島の男性や、サハリンで合気道を学んだことが日本語や日本文化を学ぶ動機となったと言った。今回初めて参加の女性などを含め、ベテラン組、初心者組ともども、それぞれのレベルに合わせて日本語会話の向上を目指して研修に取り組んでいた。

研修の成果について、ベテラン組は「島を訪れる日本人との交流に役立てたい」、初心者組は「日本での体験を島の友達に伝えたい」と、抱負を語っていた。

(交流部)

「アルゼンチン青年交流団」北海道を訪問

北海道とアルゼンチンの友好を深める目的で、平成19年度「アルゼンチン青年交流団」一行8名が10月18日から8日間の日程で来道した。道民がアルゼンチンに移住して今年が90年の節目の年にあたることを記念してはじめて迎えた。

北方圏センターでは、町田専務理事の歓迎を受け、引き続き、南米関係団体の人々と懇談した。短い滞在の中、「道立開拓記念館」や「開拓の村」では北海道の歴史を学ぶとともに各種施設を精力的に見て回った。さらに札幌東商業高等学校を訪れ生徒達となごやかに交流した。

また、父祖のふるさとにも足を運び親戚の人たちとのひとときを過ごし10月25日、離道した。(国際協力部 南米圏交流室)



札幌東商業高等学校視察 生徒との交流

「Let's Enjoy 北欧ショートShorts!」短編映画も異文化理解のひとつ

北方圏センターでは、去る9月4日夜、北欧出身の監督が制作した短編映画の上映会を行った。「札幌国際短編映画祭」の出品作の中からノルウェー、スウェーデンの8人の監督による1分間から最長でも14分弱の短編作品8本をワークショップ形式で上映した。

いずれの作品も日本とは異なる文化を背景に感性豊かに表現され、「あっ」という間に終わってしまう超短編作品にも感じたことを語り合った。参加者たちの意見、感想はそれぞれの監督たちにフィードバックすることで上映の許可を得たものである。冬に第2日目を予定している(日時未定)。

(調査研究出版部)



Short Filmsの作品を上映中